

病児保育奮闘記

(19)

子どもサポート H&K
大石 仁美

嘔吐・下痢は要注意!

ウイルスの種類はいろいろあるでしょうが、嘔吐、下痢と聞くと、スタッフはかなり緊張します。

かつては、ロタウイルスでこわい経験をしたことがあります。「シャーッ」と異様な音が聞えてくるのです。下痢をした音です。つかまり立ちをしている子の紙オムツを覗いてみると、まるでおしりが水様便の中で泳いでいるよう。

一度の量が多いので、みるみる脱水に。あわてました。ふっくらとした可愛い子のまぶたが萎んでいくのが分かるのですから。ワクチンが出来たおかげで、ロタは近年みられなくなりました。本当に医学の進歩はありがたいです。

冬場に流行るノロウイルス。こちらも大変。それでも、対処の仕方が広く行きわたり、衛生管理が行き届いてきたことなどから、減ってきたなあ実感しています。

どんなウイルスにしろ、処理を誤って、他の子どもに感染させてはいけないし、嘔吐で水分が取れなかったり、取れたとしても、下痢がひどくて、脱水が急激に進んだりしたとき、救急搬送のタイミングを逃さないようにしなければなりません。

嘔吐の激しいAちゃんの場合

普段はとってもひょうきんで、活発な3才のAちゃん。お母さんに抱っこされてやってきました。昨日から嘔吐が続き、朝ごはんも全く受け付けなかったよう。よほどしんどいのか。布団に寝かせると、うつぶせに臥せったまま、動こうとしません。

小さい子どもがじーっと臥せったまま動かないというのは要注意の症状です。子どもは熱があっても、鼻水が垂れ流しで息がしんどそうでも、泣くことはあっても、動かないということは滅多にありません。昨日から嘔吐が続いているとすれば、睡眠不足もあるでしょうが、それだけではなさそうです。これは注意深く観察しなければいけません。普段のAちゃんを知っているだけに異様な雰囲気なのです。

スタッフはみな緊張しました。

熱は37.4℃ この程度なら熱があるとはいえないけれど、微妙なところ。脱水のせいもあるでしょう。可能なら一口ずつでも水分を取らせて様子を見ることにしました。

「あっ、Aちゃんが吐いたよ！」保育士の声で急いで駆け付けると、うつ伏せに寝ているシーツの周りが、粘調な黄色水様液でべっとり汚れています。食事をとっていないので、食物残

渣はありません。「しんどいね。」身体をさすりながら声をかけると、薄目を開けて、身体をねじるようにして起き上がろうとします。そしてまた、布団にバタン。自分の一番楽な体位で横になりました。そしてそのまま目を閉じました。眠ってしまいそうな様子なので、しばらくそっとしておくことにしました。

10分後「あっ、また吐いた！」

少量ではあるけれど、その後10～20分間隔で、3回の嘔吐。これはやっぱりいけません。入室してから2時間が経過。排尿がまだなのも気になります。とりあえず親に報告しなくては。お仕事が忙しくてもどうかお母さん、電話に出てくださいねと祈るような気持ちで連絡を入れましたら、携帯電話にすぐ出てくれたので、ほっと一安心。Aちゃんの様子を報告しました。案の定お母さんは手が離せない様子。

「そちらの判断にお任せしますのでどうぞよろしくをお願いします。」

「わかりました。それでは今から病院につれてまいります。」

午前中の診察が終わらないうちに急がなくてはと、近くの総合病院に電話を入れ、タクシーを手配。ほどなく病院に到着し、荷物を肩にかけ、ぐったりした子どもを抱いて、受付に走りました。受付のスタッフは、長椅子に座って、子どもを抱いたまま、受付用紙の記載に四苦八苦している私を見かねたのか、窓口から出てきてくれました。子どもの方を抱きとめようとしてくれましたが、Aちゃんが嫌がります。それで、用紙記入の方を手伝ってくれました。なんと親切と感激。小児科外来に電話連絡してくれたので看護師さんたちが待機してくれていて、スムーズに医師の診察を受けることが出来ました。

医師は、以前もお世話になったことのある穏やかな年配の先生でした。予想どおりの脱水で、輸液を開始。ベッドに寝かせるときの、情なさそうなAちゃんの様子を見ていると、昔もこんなことがあったなあと、自分の子どもが何度か点滴を受けた時、泣き叫んでいた情景を思い出し、

その時の緊張感がよみがえってきました。「がんばって！Aちゃん。」

ずーっとそばに付き添っていたいの、看護師さんに追い出されて、しかたなく、部屋の外で待つことに。待つことの長いこと。廊下に貼ってある「予防注射をうけよう」というポスターや、ドクターのスケジュール表、お知らせの張り紙、子どもが喜ぶキャラクターの壁飾りなど、ぼんやりと眺めているうちに、やっと「どうぞ」とドアが開きました。

Aちゃんは処置室の隣のベッドルームに寝かされていました。処置が終わってほっとしたのか安堵した表情。「がんばったね。」と手を握っていると、そのままスーと入眠しました。

子どもの寝顔は、不思議な力を持っているものだと思います。大人の寝顔も良いけれど、子どもは格別。いつまでも眺めていたい。あどけなさ、無心、小さな、か弱い生き物。希望、そして癒し。その小さな命に底知れないエネルギーを秘めて、おとなを励まし勇気を奮い立たせる、そんな存在。お母さんはきっと心配しているだろうな。お家のみんなにとって、宝物のAちゃん。宝物が気持ちよさそうに眠っている。そのそばで、点滴がぼとりぼとりと小さく落ちていくのを眺めながらどんなにほっとしたことでしょう。

さあ、もうすぐ終わり、と思っていたら、脱水が強いので、もう一本追加しますとのこと。時計は2時を少しまわりました。予定の時間に帰れそうもありません。病児保育室に電話を入れて経過を報告。すると「長くなるようなら、交代します。」と言って、保育士さんが自転車でかけつけてくれました。私とその自転車ですぐ帰れるようにと嬉しい配慮。職場に帰ってすぐ、お母さんにもう一度電話で報告をし、遅めの昼食をとりました。なんだか食べたのか食べてないのか分からないような昼食でした。

「3時過ぎに母親と交代しました」と保育士が帰ってきて、やっと一件落着です。